

---

# 天駆龍閃

赤とんぼ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天駆龍閃

### 【Nコード】

N4590D

### 【作者名】

赤とんぼ

### 【あらすじ】

自称パチプロの草薙一が崩壊してしまった世界で新たな生き方を見つける物語。崩壊した世界。暴徒化する市民。そこは日常とは全く異なる生活。壮絶な物語が幕を開ける。

## ブログ・崩壊

2008年

・・・・・・世界は崩壊した・・・・・・

俺の名前は草薙 一。

自称パチプロの23歳。

仕事はもちろんパチンコ。借金は多少あるが、何とか食いつないでいる。

工業高校を卒業して某工場に勤めたはいが、1ヶ月と持たずに先輩と喧嘩して退職。

その後は、ずっとパチンコで飯を食っている。

安定はしていない生活だが、自分では何にも縛られないこの生活に満足していた。

今日も何時ものようにパチンコ屋の10時のオープンに向けて家を出た。

空は雲行きが怪しくひと雨来そうな天気だ。

カラスがゴミを荒らして餌として喰っている。  
そのおこぼれを狙って黒猫が息を潜めている。

・・・何か不吉な予感がする。空も気持ちが悪いくらいにドス黒く、

稲光を発している。

しかし、天気や黒猫なんか気にしてられない。

俺の仕事はパチンコだ。

今日も少しでも稼がなきゃならない。

ここ最近では負けてはいないが思うように稼げずギリギリの生活が続いている。

今日辺りは肉でも喰いてえな。

俺の本心だ。

いつものパチンコ屋でオープンと同時にダッシュ！

狙い台ゲット！つと、ここまではいつもと同じ。

後は、なるべく少ない投資で大当たりを引きたい所だ。

回りは良い。

朝の気分とは裏腹に、だんだんと今日は勝てそうな気分になってきた。

・・・《ブツンッ！》。

「ん？何だ？」

突然打ってたパチンコ台の液晶が真っ暗になった。

最初は何かの演出かとも思ったのだが、打ち慣れたこの台にこんな演出が無いことはすぐに解った。

周りを見渡せば、全ての台の液晶が消えている。

だんだんと他の客達が騒ぎ始める。

停電か？と思った刹那・・・・・・・・

《ガガガガーンッ！！》

ん？何だ？

建物が揺れている！

《ドーーーーーンッッ！！》

《ガラガラドドドドッ！！》

なっ何が起きてるんだ！

パチンコ屋が崩れて逝く！

《ガシャーーン！！》

目の前が真っ暗になった。

何が起こったのかも解らなかった。

きっと地震が起きて建物が崩れたんだろう。

俺は生き埋めになってしまったのかな・・・・。

俺の意識は遠のいていった・・・・。

・・・・・・・・。

．．．．．  
．．．痛え．．．  
体中が．．．痛え。

だんだんと意識が戻ってくる。

．．．俺は．．．生きてるのか．．．。

確か、地震が起きて．．．俺は生き埋めになったんじゃ．．．。

ゆっくりと目を開けた。

．．．空が見える。

今朝見たときと同じ、ドス黒い空。

辺りを見回した時、俺は啞然とした。

．．．街全体が崩れ落ちている．．．。

パチンコ屋も全壊し、辺りには．．．死体の山．．．。

俺は奇跡的に生き延びたみたいだ。

俺はいつも通りに、ただパチンコを打ってただけなのに．．．。

何故こんな事に。

しかし、これは始まりに過ぎなかった。

街が崩壊したのは地震ではなかったのだ。

俺、草薙 一は、この先壮絶な物語に引き込まれて行く。

## 第1話 本性

目の前に広がるのは崩壊した建物。

生き延びた人々が慌ただしく騒ぎ立てる。

怖さは多少あったが思ったよりも冷静な自分がいた。

正直な話、俺にとっては日本が、世界がどうなろうと全く興味がなかった。

家族とは縁を切り、人付き合いもない。なので友人と呼べる存在もない。仕事はパチプロ。

なんで俺が死ななかったんだろうと本気で思っていた。

体中が痛い。きっと建物が崩れ落ちるときに、ぶつけたのだろう。

俺は、とりあえずアパートに帰ることにした。

きつと崩れ落ちているだろうが・・・。

アパートは予想通り見るも無惨な姿で崩れ落ちていた。

金目の物はなかったし、これといって大切な物もなかったのでショックも別になかった。

ただ住む所が無くなったただけのこと。



それは俺だけではない。

この街の殆どの市民がそうだろう。

あまりの荒れ果てた街の姿に生き残った人間の中には奇声を上げるものもいた。

暫くして市内放送が流れてきた。

《ガガッピーツ》

《先程起きました激しい振動は地震によるものではありません。》

えっ？どういう事だ？

《先程の振動についてですが、この街付近だけではなく、日本全国、また、全世界で起きた現象だということが判明いたしました。詳しい詳細はまだ解っておりませんが、報告によりますと、隕石の衝突によるものだと言っております。市民の皆様は速やかにお近くの学校または、体育館に非難をお願いいたします。また詳しい詳細が解り次第、放送いたします。繰り返します……》

はっ？隕石？全世界？

そんなことあるわけないだろ？

……。

……日本全国で……マジかよ……。

正直今の状態を把握しきれないでいた。

とりあえず体育館あたりに非難したほうがいいのだろうか？

その時、俺は少しだけ現実が解ってきた。

・・・目の前で崩壊した家の中から金品、食料等を盗んでいる人達  
がいた。

今の放送を聞いて・・・・・・・・人間の本性が剥き出しになっていた  
のだ。

次第に街の人々は食料を奪い合いだした。

「これが人間の本当の姿じゃよ！」

「はっ？誰だっ？」

振り向くと1人の老人が立っていた。

老人は話を続けた。

「戦時中も似たような事態があった。・・・・・・・・もし警官や自衛  
隊、国が助けってくれないとしたらお前ならどうする？」

「あっ？何言ってんだ！国が助けないわけないだろ！お巡りだって・  
・・・。」

俺は話の途中で息詰まった。

「気づいたか？この街や街付近の事態だけなら、各都道府県、国も  
助けてくれるじゃろっよ。」

じゃが、これが日本全国ならば話は別じゃ。」

「な、なあじいさん。

これから……どうなると思う？」

「……食料を勝ち取った者の次を取る行動は……  
女じゃよ……。」

《ゾクツ》

背筋に冷たい物が走った。

この平和な日本で……まさか……そんな事が……。

老人は話を続ける。

「次第に勝ち残った男共は女を奪い合う。

誰かが守らねば、誰かが統率する者がいなければ……人間は暴徒と化す。」

目の前の光景を見れば……目の前で実際、食料を奪い合っている光景を見れば、この爺さんが言ってることが、あながち間違っていない事が解る。

しかし、早すぎる街が崩壊したのだって、つい数時間前だ。こんなに早く人間は本能を現すというのだろうか？

「……じいさん。

何で俺にそんな話を？」

「お前が、1人冷静でいたからじゃよ。  
お前は食い物を奪い合う奴らを悲しげな目で見ておった。それだけの事じゃよ。」

「爺さんは、これからどうすんだ？」

「ワシは避難所へ行く。」

そして最後までこの国の在り方を見届けるよ。」

「そつか。サンキューな爺さん。」

・・・何か吹っ切れたよ。」

俺は冷静だった。

別に何時死んでもいいと、ずっと思っていたし、今更失う物もない・  
・・・なら。

「爺さん、ちよつと待っててくれ。」

俺は食料を奪い合う物達に向かって行つた！

「デメエラ！醜いんだよ！！」

・・・

「ほらっ爺さん。食いもんだ。避難所で食べな！」

「お前は避難所に行かんのか？」

「・・・俺は・・・自分の・・・自分の生きたいように生きてみる  
！」

俺は力強く言った。

俺の本音だった。

どうせクソみてえな人生だったんだ！  
生きたいように生きてやるさ！

## 第2話 考え

俺には、どうしても気になることがあった。

あの爺さんの言うとおり街の人間が暴徒化するのは解る。  
でも、やはり早過ぎる。

街の人間の数人が食料を奪う等してるなら理解できるが、こんなに堂々と奪い合えるものだろうか？

．．．．．何かがおかしい．．．．．。

もしか俺は夢を見てるのか？

．．．考えても何も解らない。

その時、声が聞こえてきた。

「デパートだ！あそこになら食料があるはずだ！」

．．．．．。

デパート．．．か。

俺も行ってみるか。

．．．俺は不思議だった。

何故だか解らないのだが、不思議とこんな状況下でも怖さがなかつ

た。

最初は多少恐怖したのだが、時間が経つにつれ恐怖が遠のいていく。

いや・・・むしろ楽しんでいるかのようだ。

きつと俺は退屈してたんだと思う。

何も変わり映えしなかった日常に。

今、この先、この街が日本が世界がどうなっていくのが楽しみなんだ。

数日前、何気なくテレビを見ていたら、日本の借金が七百兆だが、八百兆だかつて、このままでは日本は経済破綻するというような内容だった。

だから、税金を上げるなど国民の負担が重くなるなどジャーナリスト共が熱く語っていた。

俺は無性に腹が立って、思ったんだ。

だから、俺みたいのが増えるんだよ。

俺は高校をでて仕事に付き喧嘩して辞めて・・・新しい仕事、探したんだ。

でも対した学歴もない俺をどこも雇ってはくれなかった。

仕方がなく、数ヶ月はバイトをした。

数々の税金を真面目に払っていた俺は、バイトじゃマトモに飯も喰えなかった。

仕方がなく、税金を滞納ししたら催促状が来た。

俺だって金があるなら払うさ！

でもねえもんは払えねえ！

だんだんと国に怒りを覚えた。………実際見て見る！経済破綻する前に、崩壊してるじゃねえか！

俺は頭悪いし、難しい事は解らないが、この国の行き着く先だけは見てみたい。そう思った。

デパートに着くとお巡りらしき人物が入り口で人々を抑制していた。

デパートと言っても小さなデパートで三階建てだが面積は狭く、お世辞にも流行つてるとは言い難いデパートだ。

建物は半壊していて、入り口では警官が中に入るのを止めてはいるが、半壊した建物はどこからでも侵入できるくらいに穴だらけだった。

この中にはまだ沢山の人達がいるだろう。

生きている人もいれば生き埋めになっている人も………。

警官は2人いて、スピーカーで人々をなだめる。

「建物に侵入する行為を辞めなさい！市民の方々は、すみやかに避



難所へ移動してください。」

しかし、人々は警官の話を聞こうとはしない。それに警官2人が止めようとしても無理な話だろう。

考えてみれば多少なりとも気持ちは分かる。

一瞬にして多くの人達の財産が失われたわけだ。

それならば我先にと物を確保しようといった考え方も少しは解る。

でも、本当にそれでいいのか？

俺には失うもの等なかったが、この人達にとってみれば状況は違っ  
だろう。

・・・でも醜く写る。

事態の深刻さは伝わってくる。

この街唯一のデパートに警官2人。

普通なら自衛隊でもレスキュー隊でも出動してきても良さそうなものだ。  
のだ。

きつと他の街の有り様も凄いものなのだろう。

どれだけの人間が亡くなったのだろうか？

実際、このデパートに来るまでの道のりでも殆どの家屋は全壊。

道路は亀裂し、とても車が通れるような状況じゃなかった。

日本の人口の半分くらいは失われたのだろうか？

どこか無事だった場所はあるのだろうか？

警官がスピーカーを使い辺りに向かって吠える。

「このデパートは崩壊する危険があります。中には入らないで下さい。」

思えば、この警官にも家族や友人、恋人がいるだろう。

本当なら自分の家族の安否を確かめたいだろう。

俺は少しだけ同情し、そして……少しだけ、仕事の責任、重要さというものが解った。

俺はデパートの中に入ってみることにした。

物や食料が欲しくなったわけではなく、中の状況を見てみたくなっただのだ。

それに、中には生きている人もいるかもしれない。こんな俺でも役に立てるかも知れない。

そう思ったのだ。

### 第3話 新種

デパートの中は見るも無残な光景だった。

柱は倒れ柱の下からは・・・足が・・・出ていた。

きつと下敷きになったのだろう。

煙と言っているのか、砂埃が立ち込めマスクなしでは呼吸が苦しくなる。

俺はパーカーのフードを口に当てマスク代わりにして中を進んだ。

ここは一階の紳士服売り場だろうか？

マネキンが倒れ、洋服があちらこちらに散らばっている。

先の方で声が聞こえる。

近くに寄ってみると三十代くらいの男2人が話していた。

「しかし、ひでえ有り様だな。生き残ってんのはいないんじゃないか？」

「まるで大震災みたいだな。そんな事より宝石だ！この先に宝石店があつたはずだ。」

ここぞとばかりに宝石店を狙う2人組がいた。

俺は相手にせず生存者を探した。

しかし死体を見つけることはあっても、生存者を見つけることはなかった。

目の前に階段があつた。二階へ上る階段なのだが崩れ落ち欠けていて、無理をすれば人1人通れるくらいのスペースしかない。

しかも、いつ崩れてしまつても不思議はなそうだ。

他に二階に上がる方法は、エスカレーターかエレベーター……。

電気はもちろん止まっているため二階へ上がるには、この階段を使うしかない。

物取り達も二階へは上がっていないだろう。

……危険か？……

一階を見る限り生存者はいないみたいだ。

いや、実際には既にデパートから脱出したのだろう。

でも二階の生存者が脱出してるとは、とても思えない。

その時、1人の男が声を掛けてきた。

「おい！兄ちゃん！二階はやめときな。食料も貴金属も全部一階だ。二階には金目の物はないぜ！」

この男は親切に忠告してくれてるつもりなのだろう。

男は無視する俺を気にせず話を続ける。

「それとも兄ちゃん、二階で彼女でも働いていたかい？」

・・・・・・殺したくなってくる・・・・・・

話しかけないで欲しい。・・・俺は言った。

「俺の事は気にしないでくれ。二階に生存者がいるか気になっただけだから。」

「兄ちゃん。そりゃ無理だ。諦めな！」

ボランティアのもりだか知らないが、この有り様で生存者なんかいるわけねえ。」

俺は無視して二階に上がった。

「兄ちゃんしらねえぞ！どうなっても！」

男の声が遠のいていく。

二階に上がると大きな柱が倒れ、通路を塞いでいた。

天井を見上げると三階の駐車場を通り越して、ドス黒い空が見えた。

三階の駐車場からは駐車してあった車が今にも落下してきそうな状態だ。

流石にここは危ないか。

俺は心の中で呟く。

車が落下してくれば、一気に一階まで落ちてゆくかも知れないし、その衝撃によってデパート自体が全壊してしまうかもしれない。

でも俺は戻らなかった。

何故だ？

俺は、こんなキャラだったか？

自分でも解らなかった。

俺は歩けそうな場所を探しながら、ゆっくりと進んだ。

ふと上空から気配を感じた。

空を見上げた時、俺は固まった。

．．．．．。

．．．言葉がでない．．．。

車が落ちてきたわけではない。

建物が崩れ落ちてきたわけではない。

．．．．．空に．．．ただ．．．鳥が飛んでただけなんだ。

．．．見たこともない鳥が．．．。

やっと言葉が出た。

「なっ何なんだ・あの鳥は！」

一見見たところ、その姿はカラスみたいなのだが、大きさが違いすぎた。

俺は鳥のことは詳しくないが、コレだけは解る。

地球上にあんなデカイ鳥はいない！

頭には二ワトリみたいなトサカがあり、全身はカラスみたいに真っ黒。

大きさが、3メートルはあるのではないだろうか。

次第に外がざわつき始める。

スピーカー越しに声が聞こえてきた。きっと外にいた警官の声だろう。

「みなさん。すみやかに避難して下さい！」

俺は壁に穴が開いている場所から外の様子を伺った。

・・・信じられない光景だった・・・。

その鳥達は・・・人間を襲い・・・食していた・・・。

## 第4話 隔離

一体何が起きてるんだ！

鳥が人間を喰うなんて・・・。

・・・確か市内放送で、この震災は地震じゃなくて隕石によるものだって言ってたよな。

・・・何か関係あるのだろうか？

ハッ！と俺は気付いた。

ラジオ！ラジオだ！

ラジオから何か情報が流れているかも知れない。

俺はデパート内のショップから、ラジオを探す。

しかし、今時、ラジオなんて置いてるのか？

自分に自問自答しながらラジオを探す。

目の前にレディース物のショップを見つけた。

今時のギャル服と言うのだろうか、渋谷辺りの若い女が着ていそうな洋服屋だ。

俺は中に入りラジオを探す。



《ゴトツ!》

ん?

《ガタツゴトツ!》

「誰かいるのか?」

俺は口走った!

「たっ・・・たす・・・けて。」

女の声だ。

俺は声が聞こえた方に駆けよる。

そこには洋服棚に下敷きになっている女がいた。

「大丈夫か?」  
「待ってる! すぐ助ける。」

俺はホットした。

生存者がいたのだ!

必死に棚をどかし女を引きずり出した。

—  
「大丈夫か?」

女

「はっはい。でも足が。」

どうやら棚の下敷きになって足を骨折してるみたいだ。

—

「とりあえず外に出よう！俺の背中に」

《ガターンッッッ！！》

言葉を発した直後、衝撃が走る！

《ガガガッガラドシャ！ドスーンッ！》

……どうやら無事みたいだ。

しかし、目の前は瓦礫の山だった。

……上から車が落ちて来て、その衝撃で建物が崩れたようだ。

—

「おい！大丈夫か？」

女

「はっはい。」

女の顔をよく見ると恐怖からか、顔が青ざめている。

—

「心配すんな！直ぐに外に出してやる！」

目一杯、自分を作り言った。

女

「ありがとう。でも、この足じゃ。」

確かに、この瓦礫の山を女を抱えて出るには無理がありそうだった。

何より冷静に考えてみれば、外には化け物鳥がいる。

無事外に出れたとしても身の安全は保証できない。

.....。

—

「ここにラジオが聞ける物はあるか？」

女

「えっ？・・・確かラジカセならあると。」

—

「どこにある？」

女から言われた場所からラジカセを探す。

辺りは瓦礫の山でラジカセを探すのも一苦労だった。

—

「あつた！」

運良くラジカセは見つかったが、問題は動くかどうかだ。

「ガガッピールガガッ」

動いてくれ。

「ガガッピールガガ」

「ガガッ・・・繰り返しお知らせします。」

動いた！聞こえる。これで情報が聞けるかも知れない。

「今日、午前10時30分に起きました隕石による衝突によって各地に被害がでております。」

隕石はほぼ日本全土に衝突したと思われます。

各地の被害に関しましては、余りにも広範囲に被害が出ているため救済活動が困難な状態が続いております。

尚、今し方入った情報によりますと、謎の生物が確認されており、その生物が国民を襲っているとの情報も入ってきています。

国民のみなさまは、充分注意し避難して下さい。引き続き情報が入り次第お伝えいたします。」

女

「何、一体何が起きてるの？」

—

「・・・・・・・・。」

俺は迷った挙げ句、今解っている限りの情報を彼女に話した。

返ってパニックに陥らなければいいと思ったが、黙っているよりもいいと判断した。

女

「そんな・・・信じられない。」

彼女は泣き崩れ、そのまま黙り込んでしまった。

・・・無理もない。パニックを起こさないでくれただけでもよかった。

空を見るとすっかり日が暮れていた。

時計をみたら、午後7時。これからどうすればいいのだろうか？

周りは瓦礫の山、もし瓦礫を動かせたとしても、果たして一階に降りる階段は無事だろうか？

そして、無事に外に出れたとしても化け物鳥・・・。

これから俺達はどうなってしまうのだろうか？

外から聞こえてた叫び声や警官の声は、すでに聞こえなくなっていた。

## 第5話 葛藤

彼女はずっと黙ったままだ。

無理もない。

こんな死体や瓦礫だらけの中に知らない男と2人きりでのなか

周りは月明かりに照らされているくらいで、殆ど見えない。

隣にいる彼女の顔さえ ハッキリと見えなくらいだ。

夕方みた彼女の顔は恐怖で青ざめていたが、とても綺麗な顔立ちをしていた。

今時のちよつとギャル系の顔立ちで髪は茶髪、化粧も濃いめの感じだったように思う。

普通ならば、こんな可愛い女と2人きりであるならば、何かアクションを起こしてもよさそうなものなのだが、彼女の状態を見ていると、とてもそんな気にはなれなかった。

どのくらい沈黙が流れただろう。

ようやく彼女が口を開いた。

女

「あの、・・・助けて頂き有難うございました。

あなたが助けてくれなかったら、この暗闇の中で1人きりになる所

でした。」

— 「ああ、そんな事気にしないで。」

女 「これから、どうなるんだろう。」

— 「朝になったら動き出そう。  
絶対に此処からだしてやるから心配すんな!」

女 「有難う。・・・でも・・・怖い。  
外には鳥の化け物が・・・。  
私の家族は無事かな・・・。」

— 「・・・正直わかんない。」

ラジオから流れてくる情報を聞いていたら、きっと大丈夫・・・なんて軽々しくは、とても言えなかった。

— 「アンタ、名前は？  
言いたくなけりゃ別にいいけど。」

女 「あつ、千鶴です。」

—  
「俺は、—。」

「—」  
出会ってから数時間後の自己紹介だった。

ラジオからは、夕方から変わらない情報が延々と流れていた。

それから俺達はお互いの事を話した。

どうでもいいようなことを延々と。

彼女は何か話していないと怖かったのだろう。

彼女の年齢は二十歳。付き合って1年の彼氏がいて、兄弟は2人、弟がいるらしい。

この洋服屋には、まだ勤め始めたばかりで、今日の出勤は他に店長が居たらしいのだが、銀行に行っていて1人だったと言ったことだった。

それから俺達は今の状況を話し始めた。

—  
「鳥の化け物が現れたのは、隕石によるものなのかな？」

千鶴

「今の所、そうとしか考えられないですね。」

—  
「やっぱそうだよな。何かありえなくね？」



宇宙人でも侵略しに来たとしか言いようがねえよ。」

千鶴

「・・・本当にそうなのかも。」

—

「本当にどうなっちまうんだろうな。ってか、まずは此処から出なきゃな。」

千鶴

「そうですよ。ここを出ないと何も始まりませんよ！」

彼女は少しだけ笑いながら、そう答えた。

俺は嬉しかった。

パチンコしか取り柄がなかった俺が、彼女を救うことができた。

実際には此処を出ないと本当の意味で救った事にはならないのだから、それでも、何か自分が居たことで彼女を救えたという事実が嬉しかった。

いつしか彼女を無事に此処から出すことが俺の目標になっていた。

外からは何も音は聞こえず。ラジオの声と俺達2人の声が広いデパートの中に広がっていた。

今、このデパートの中で生きているのは俺達2人だけなのだろうか？

きっと他にも俺達と同じように生きている人がいると信じたかった。

彼女の足の具合も気になったが、俺に、痛いとか苦しいとか一言も言わない彼女は精一杯無理をしているんだろうなと考えていた。

困ったのはトイレだった。

俺は何とでもなるのだから、彼女の方はそうはいかない。

恥ずかしそうにトイレに行きたいという彼女は、とても可愛く思えた。

彼女をおぶり、少し離れた所まで連れて行き、俺が離れてから彼女は用を足した。

少しだけ欲情しそうになる自分を必死で抑えた。

彼女の用を足す音が気になって気になって仕方なかった。

トイレが終わり、俺を呼ぶ。彼女の足下には彼女から流れ落ちた尿が・・・。

興奮と欲情の狭間で1人戦っている自分が居た。

普通の健全な男だったら、きっと我慢できないのだろう。

でも俺は違っんだと、何度も自分に言い聞かせ葛藤していた。

暫く他愛もない話をして彼女は俺の腕を掴み、

「どこにもいかないでくださいね。」と言い少しだけ眠った。

俺は彼女を抱きしめたくなかったが我慢して空を眺めていた。

やがて空に明かりが射してきて夜が明けた。

此処からの脱出だ。

俺は少しだけ寂しかった。

もうちょっとだけ彼女と2人の空間を楽しみたかったのかも知れない。

## 第6話 脱出

【ここから脱出だ！】

俺は彼女を負ぶさり一歩一歩前に進んだ。

瓦礫をどかしながら。

たまに、瓦礫を動かしたら・・・手や足・・・顔などがあり、腰が抜けそうになる。

きつと1人ならば発狂してしまうかもしれない。

柱と瓦礫の間から髪の毛が出ていたり、酷いときには、足元に柔らかい感触を感じ、見たら人間の目だったりもした。

俺は彼女の前で何とか平静を装うのがギリギリだった。

彼女はずっと目を瞑ったまま俺の背中にしがみついていた。

何とか瓦礫をどけ、階段の所まで辿り着いた。

・・・階段がない・・・。

予想はしていたのだから、現実を目の当たりにしたら挫けそうになる。携帯でも使えるならば、どれだけ楽だろう、携帯はずっと使えないままで、唯一役に立つのは日が当たらない場所で灯りの代わりになるくらいだった。

と言っても携帯の灯りなど気休め程度のものなのだが。

後、ここから降りる方法は………崩れた瓦礫の上を行くしか方法はない。

だが、とてもまともに行けるような場所はなく、途中まで下り飛び降りるしかなかった。

その時、一階から物音がした。

—

「下に誰がいるのかもしれない。」

彼女は俺にしがみついたまま何も答えなかった。

余程怖いのだろう。

こんな状況では無理もない話だ。

俺は必死で叫んだ！

—

「誰か居ませんか？

誰かいるなら答えてくれ！」

………ガタツゴトツ。

物音はするのだから返答はない。

怪我でもして、声がでないのだろうか？

俺は続けて叫ぶ。

—

「誰かいらないのか？」

聞こえてるなら、合図をしてくれ！」

《ガタツガタガタツ》

音が近づいてくる。

良かった。何とか助かるかも知れない。

—

「おい！俺達はここだ！ここにいるぞ！」

《ガタツ》

姿が見えた。

・・・！？

違う！人じゃない！

薄暗くてハッキリとは見えないのだが、その姿は明らかに人の姿ではなく、全身真っ黒の・・・！？

昨日の化け物鳥だ！！

ヤバイ！！

俺は彼女をおぶったまま、物陰に隠れた。

千鶴

「どうしたの？何かあった？」

—

「静かに！」

「……昨日話した化け物だ。」

彼女の顔から生気が消える。

どうすればいい？

何か方法はないか？

化け物鳥の姿が視界に入ってきた。

まだこちらには気付いていないようだ。

陽の光に照らされた化け物鳥の姿は、異様でとてもおぞましいものだった。

クチバシには……人が……。

喰われてる。

どうする？どうすればいい？

……いつそ戦うか？

化け物といつても所詮は鳥だ、一匹くらいなら何とかなるかも……。

無理だ！……俺が何とか出来るくらいなら、昨日の警官が何とかしてるはずだ！

どうしようも出来なかったから、みんな喰われちゃったんだ……。

もし、俺が戦ったとしてコイツに喰われちゃったら、彼女はどんなる？

あの足では、此処から出ることはできないだろう。

……どうすればいい。

武器になりそうな物は沢山ある。

瓦礫にマネキン、ガラスの破片に……俺の目の前に包丁が転がっている。

二階にあった軽食屋のものだろう。

……戦うか。

彼女を奥の方に避難させ俺は戦う事にした。

千鶴

「無理しないで。」

—



「任せとけ！焼き鳥にしてやる！」  
目一杯、無理をして格好付けていった。

実際は足はガクガクと震え、顔は引きつり、どうみても格好良くは写らなかつただろう。

化け物鶏は、まだ一階にいる。だが、明らかに俺達を探している。

さつき俺が人と勘違いし叫んでしまった為、ここに人間がいるってことがバレてる。

緊張感が漂う。

こんなに緊張したことなんて、高校の時、告白した時以来だ。

《バサバサッ！》

とうとう化け物鶏は二階に飛んできた。

来るならこい！相手してやる。

彼女を此処から出してやる事が俺の役目だ！

俺は喧嘩には多少の自信はあった。

俺が通つた工業高校はお世辞にも偏差値の高い学校とは言えず、いつも他校の連中と喧嘩ばかりしていた。

それでも若いときは多少の名は通つてたんだ！

高校を卒業してからは就職の為、地元を離れたが、地元では負け知

らずって何かの歌の通りだったんだ。

ただデカいだけの鳥なんかにやられてたまるか！

その時、化け物鶏と目が合った。

俺は包丁を強く握りしめ・・・覚悟を決めた！

## 第7話 記憶

ヤツの目が俺を餌として見ているように感じる。

ヤツからしてみれば俺は只の獲物にすぎないのだろう。

・・・・・・昨日出逢ったばかりの彼女。

彼女に興奮を覚え、彼女に欲情し、彼女を愛おしく感じ、いつしかそれは恋に変わっていた。

吊り橋効果？ってやつなのだろうか？

人は極限状態で恋に堕ちやすいらしい。

俺の勘違いなのかもしれない。

もしかしたら、彼女を救ってやったと言う優越感からかもしれない。ただ俺は、その時、初めて・・・死にたくないつて思ったんだ。

彼女には彼氏だっているし、ましてこんな環境で、好きだの嫌いだの考えている自分の方がおかしいだろう。

それでも・・・俺は彼女を此処から出すんだ！

彼女の前で情けない姿を見せたくない！

気が付いたら足の震えは不思議と止まっていた。

ヤツが真正面から向かって来た！

俺はすかさずしゃがみ込み、ヤツの喉元に持ってた包丁を突き刺した！

《グエエー！ツツツ！！》

ヤツの不気味な悲鳴がこだました！

とつさに、よくこんな行動が取れたと我ながら感心する。これが火事場のクソ力ってやつか。

だが、まだ終わっちゃいない。

ヤツは苦しみながらも、こちらに向かってくる！

すかさず俺は距離をとり、近くにあったマネキンを足元から掴み、ヤツめがけて放り投げた！

見事に命中したが、包丁と違い効き目はなかったようだ。

包丁はヤツの喉元に突き刺さったままだ。

何か武器になるものはないのか？

彼女の姿が視界に入ってきた。

とても心配そうな顔でこちらを見ていた。

不思議だった。

えらく落ち着いている自分がいる。

何故なんだろう？

俺の三倍はあるであろう、化け物鳥を目の前にして怖さが消えていく……………。

俺は彼女に向かって言った。

—

「だから、心配すんなって。直ぐに終わらせるから。」

俺は化け物鳥に素手で向かっていった！

ヤツの目をめがけて思いっきり拳を振り下ろした！

……………。

千鶴は一を不安そうに見ていた。

……………。

千鶴は一の事を知っていた。

まだ私が女子校に通ってた頃……………。

私がファーストフード店でバイトしてた頃、アナタはいつも此処に来てた。

決まってメニューは、ホットチキンバーガーと焼き肉ライスバーガーのセット。

飲み物は決まってオレンジジュース。

毎日、毎日来るから、次第に顔を覚えちゃった。

最初は何をしてる人だろうって思った。

だって毎日来るのに、来る時間はバラバラ。

不規則な時間の仕事してるんだろって思った。

バイトの先輩から、

「あの人、毎日来てるよね！パチンコ雑誌持ってるし、あれはパチプロだね！」って言われて初めて仕事が何かって解った。

と言ってもパチンコなんて高校生だった私にはよく解んなかったし、ただアナタが毎日、自由そうに生きているみたいに思えて羨ましかった。

次第にアナタがバイト先に来ることが楽しみになっていった。

いつだったかな。

狂牛病問題で外国産の牛肉の輸入が禁止され、アナタの大好きな焼き肉ライスバーガーの販売が停止されてしまった。

そんな事は知らないアナタは、いつも通りお店に来て、いつも通りの注文をする。

—

「ホットチキンバーガーと焼き肉ライスバーガーのセット。  
飲み物はオレンジジュースで。」

千鶴

「申し訳ありません。今、焼き肉ライスバーガーは販売を停止しております。」

—

「えっ？マジで？……どうしよっかな？……じゃあ、ホットチキンバーガー二つにして！」

エー——ッ！？って思った。

他の注文すればいいのにつて。

その時のアナタの残念そうな顔が忘れられなかった。

その時の私のバイトってアナタに会うことだけが楽しみだった。

たまにこない日なんかは無性にイライラしたりしてたのを覚えてる。

私が、それを恋だと気付いた時には、アナタはお店に来なくなってた。

その後、私はバイトも辞め、次第にアナタの事も忘れていった。

・・・昨日、アナタが私を助けてくれた時、ドキドキしてたんだよ。まさか、あの時のアナタが助けてくれるなんて。何かのドラマみたいに感じちゃった。

トイレに行ったときも死ぬ程恥ずかしかったし、少しだったけど、アナタの横で眠れたのが無性に嬉しかった。

アナタはずっと私を励ましてくれた。

足が物凄く痛かったけど、アナタの優しさで痛みが和らいだ気がした。

助けてくれたのが、アナタで良かった。

・・・・・・・・。。

一が千鶴のお店に行かなくなったのは、ただパチンコ屋を変えただけであり、一はまた、同じ店のチェーン店で同じメニューを注文する。

ただそんな2人の数年前の過去。

千鶴は高校を卒業し、今の彼氏と出会い、それなりに充実した毎日を送っていた。

・・・・・・・・。。

・・・・・・・・拳が痛え。

おもくそに殴りつけてやったのに、ビクとしねえ。

ふざけやがって！

ヤツはクチバシで俺を貫こうとしてきた。

上等！ぶっ殺してやる！！



間一髪、避けることができ、喉元に刺さっていた包丁を抜いた。

ヤツはまた奇声を上げ俺めがけてクチバシを振り下ろす！

俺は今度は包丁をヤツの目に突き刺した！

【ドカッッッ！！】

突き刺したと同時に、吹き飛ばされた！

・・・記憶が無くなりそうになる。

・・・ヤバイ！！壁に衝突する！！

【ドカッッッ！！】

・・・いつ痛つてええつ。

正気を保っているのがやっとだった。

《グウエエエーッ！》

ヤツももがき苦しんでいる。

今がチャンスなのに、壁にブツケられた痛みで体が動かない。

—

「くそっ！！」

その時、さっきの衝撃で建物が崩れ落ちてきた。

ヤバイ!!

俺は無理矢理に体を動かし、彼女を抱きしめた……………。

轟音とともにデパートが崩れ落ちていく。

急に足元に重力を感じなくなり、下に落ちていく。

俺は彼女を抱きしめたまま決してその腕を離さなかった。

……………。

……………。

……目の前には光が見える。

待ち望んだ外の景色だ。

どうやら無事だったみたいだ。

彼女も何ともないようだ。

目の前には、瓦礫に潰された化け物鳥の姿があった。

……………よかった。……………本当に良かった。

—

「外に出よう!」

千鶴

「うん。」

—

「流石に腹減ったね。昨日から何も食べてないし。今何か食べたいものある？」

千鶴

「・・・ホットチキンバーガーと焼き肉ライスバーガー！」

—

「えっ？・・・俺の大好物！」

千鶴は嬉しそうに言った。

## 第8話 道中

デパートから外に出た。

そこには、とても無惨な光景が待ちうけていた。俺は彼女に目を瞑らせた。

とても彼女に見せられる光景ではなかったからだ。

まず目に入ったのが、昨日の警官の・・・無残に喰い殺された後の死体だった。

と言っても面影などはなく、かろうじて残っていた制服の残骸でそう思った。

きつと市民を守るために身をていして犠牲になったのだろう。

少し先には昨日の宝石泥棒らしき2人組の死骸もあった。辺りに貴金属が転がっていたため間違いはないだろう。

他にも辺りには無残に喰い殺された無数の人間の死体が転がっていた。

—

「目を瞑ったまま聞いて。

とりあえず避難所に行こう！

キミの足も心配だし、何よりそこにいけばキミの家族もいるかも知れない。」

千鶴

「うん。・・・迷惑かけて・・・ごめんね。」

千鶴は自分の足のせいで負担になっていると思っているのだろう。

俺は、気にしないでと声を掛けその場を後にした。

俺たちは少し離れた市民体育館を目指した。

千鶴

「・・・私・・・重くない？大丈夫？」

—

「はっ？何言ってるの？」

重かったら、その辺に捨てていくよ！」

俺はおどけながら答えた。

千鶴は俺の肩に強く寄り添い、暫くの間沈黙のまま歩き続けた。

俺の背中に彼女の胸の感触が当たる。

耳には彼女の吐息がかかる。

彼女は凄く痩せており、負ぶって歩く事は苦痛ではなかったが、胸の感触と甘い吐息が俺を苦しくさせた。

相変わらず街並みは悲惨な光景で、崩れ落ちていない家屋等、一軒も見当たらなかった。

幸いだっただのは、辺りを見ても空を見ても化け物鳥の姿が見当たらなかったことだ。

暫く歩いていると、前の方から1人の若い男が歩いてきた。

男はボロボロの姿で、まるでイジメにもあつたかのような服装、表情をしていた。

俺は尋ねた。

—

「ちよつと待った！」

あんた、避難所の様子は解るか？」

男

「・・・避難所？」

あんた達、避難所へいくのかい？・・・辞めた方がいいよ。」

—

「・・・どう言う事？」

男

「避難所は人で一杯で、これ以上入れる状態じゃないよ。」

食料だつて支給されていないし、馬鹿共が調子に乗って仕切ってるし。」

「馬鹿共？」

男

「・・・行つて見れば解るよ。」

あんなところに居るくらいなら自分で自分の身の安全を守つた方がましだよ。」

—  
「アンタは、これから何処へ行く？」

男

「さあね。決めてもないし、こんな状況じゃ何処にいても同じ事だよ。」

避難所で飢え死にするか、外でカラスの化け物に喰われるか・・・  
どのみち助からないよ。」

—  
「・・・・・・・・。」

男

「それに、そんな綺麗な子連れてるし、危ないんじゃない？」

—  
「はっ？何が言いたい？」

男

「避難所にいるみんな、昨日から何も食べていないし、みんな殺気立ってるよ。」

落ち着いていたのは昨日の夜まで、夜中になると馬鹿共が調子に乗ってきた・・・。」

とても聞けなかったが、きっとこの男はそいつらにイジメにでもあったのだろう。

見るからに弱々しそうな姿をしているこの男には避難所は辛い所だったのだろう。

男

「じゃあ僕は行くよ。」

こんな所でカラスの化け物に食べられるのも嫌だしね。」

—

「ああ。有難う。」

君も気を付けてな。」

男はそのまま去っていった。

千鶴

「大丈夫かな？・・・避難所？・・・何か・・・怖い。」

—

「・・・とにかく行ってみるしかないね。」

何かあっても・・・俺が守るから！」

千鶴

「うん。有難う。」

彼女は強く俺の肩を握り締めた。

本当は、このまま2人でどっかに逃げる？と、言いたかったのだが、頭がおかしいと思われるだろうから辞めた。

何より彼女の足の状態を考えたら冗談でも言えなかった。

俺の頭の中に、爺さんの言葉が蘇る。      食料を勝ち取った者の次に取る行動は・・・女じゃよ！



翌々考えてみれば、警官や日本の政府が助けられないならば、人間は本能のまま動くのかも知れない。

そうなれば爺さんの言うとおり、力あるものは女を奪うという考え方も頷けた。

しかし迷っている暇はないし、何より彼女は足を怪我してる。

避難所に行けば手当てしてくれる人がいるかもしれない。

行くしかないんだ。

俺達は先に進んだ。

・・・太陽が真上に来る頃、ようやく避難所が見えてきた。

多少の不安をよそに、俺達は避難所へ向かった。

## 第9話 喧騒

市内の体育館である避難所に着いた。

避難所は人で溢れ返っている。

中に入れなかったのだろう、大勢の人達が体育館の外で毛布にくるまり意気消沈していた。

雨が降らなかった事が幸いだったようだ。

体育館は俺が思っていたよりも損壊が少なく、通ってきた街並みとは違い、一つの建物としてそこに建っていた。

こういった時にだけ頑丈に作ってくれた国に感謝できる。

アチコチから子供達のお腹が空いたと言う声が聞こえてくる。

俺達が着くなり、何か食べ物を持っていないか？と何人からも聞かれた。

もちろん食料なんて持っているはずもなく、何より足を怪我している彼女を負っている俺を見て、食料をくれと聞いてくる人達に心底嫌気がさした。

医者はいないか？と俺が訪ねても、返ってくる答えは決まっていた。

医者は此処にはいないのか。

とりあえず体育館の中に入ってみようとした時に声が聞こえた。

男

「千鶴！」

千鶴

「・・・貴也。」

一瞬で解ってしまった。

彼女を千鶴と呼ぶ、この男は、彼女が話していた彼氏だろう。

俺は負ぶっていた彼女をゆっくりと下ろした。

貴也

「千鶴、無事だったのか？」

足怪我してるのか？

・・・と言つか、誰？・・・ソイツ？」

千鶴

「あつ、彼は私を助けてくれたの！」

一さんって言っの。」

貴也

「ふん。

あつそ！

まあどうでもいいや！

行こうぜ千鶴。

少しなら食いもんもあるぜ！」

千鶴

「えっ、でも。」

—

「・・・良かったね。彼氏に会えて。  
俺の事は気にしないで。」

「・・・じゃあ。」

千鶴

「まって。」

貴也

「千鶴、何してんだ！早くこい！」

俺は直ぐにその場を離れた。

何故だか解らないのだが、自分が逆の立場ならそうして欲しいだろうと思ってしまったからだ。

・・・これからは、あの彼氏が彼女を守ってくれるだろう。

俺の芽生えつつあった小さな恋心は、この瞬間に終わったのだ。  
彼女との短い旅もここで終わりなんだと、そう自分に言い聞かせる。

とても寂しくて悲しかったが、これが現実というものなのだろう。

そう理解するほかなかったのだ。

俺は気持ちを切り替え、昨日の爺さんを捜すことにした。

もう少しだけ、爺さんの話を聞きたくなったからだ。その時、誰かが俺に声を掛けてきた。

男

「やっぱ一さんだ。」

「さんも無事だったんですね。」

—

「群馬か？」

この男の名前は、下畦 群馬。

確か、大手の企業に勤めるエリートだったと思う。

正直、俺もよくは知らない。

と言うのも、パチンコ屋でよく会っていて、そのうち話すようになったぐらいの仲だったからだ。

群馬

「一さん。さっき連れてた子、ヤバくないっすか？」

—

「はっ？何で？」

群馬

「いや、実はこの避難所、昨日の深夜、あっち系の人達が大勢やって来て、今この避難所仕切ってるみたいなんすよ！」

それで、さっきの子、連れてった奴、あっち系の人等の仲間っすよ！」

あっち系と言うのは、言うまでもなく、ヤクザだ！

彼女の彼氏が・・・その仲間・・・。

頭の中に不安がよぎる。

・・・しかし、俺にはどうすることもできない。

彼女の男が例えヤクザだろうと、彼女が愛した男であるのには変わらない。

—

「きつと大丈夫だろ。」

さっきの男は彼氏みたいだし。」

俺は不安一杯の表情で言った。

群馬

「・・・そうっすか。」

でも一さん無事で良かったですよ。」

確かに俺も知り合いに会えて少しホッとしていた。

群馬は避難所の状況を詳しく説明してくれた。

結局の所、この避難所は警官や自衛隊、国が守ってくれてるわけでもない為、ヤクザ達が好き放題できると言う事だった。

体育館の中は人で溢れ返っており、歩くスペースでさえない程だった。

体育館の一番奥に十分なスペースを取っている集団が居た。

あいつ等か・・・。

群馬の話ではヤクザの事務所も昨日の隕石の災害で全損してしまっ

た為、この体育館に来たらしいとの事だった。

集団の端には彼女の姿も見えた。

集団の1人が突然口走った。

ヤクザ

「兄貴！この爺、食料隠してましたぜ！」

・・・昨日の爺さんだ！

ヤクザ

「おらっ！さっさとよこせや！」

爺さん

「やめんか馬鹿たれが！  
お前等に渡す食料等ないわ！」

ヤクザ

「この爺！」

・・・ヤバイ！

群馬

「一さん、ほつといた方がいいですよ！  
相手は筋もんですよ！」

俺が動こうとした瞬間、群馬が止めに入った。

—

「こんな時に、ヤクザも糞もないだろ？」

止める群馬を引き離しヤクザの所に駆け寄った。

—

「相手は爺さんっすよ。辞めましょうや。」

千鶴

「・・・さん。」

ヤクザ

「なんじゃわれ？ワシに喧嘩売っとんのか？」

—

「俺は辞めて下さいって言ってるんすよ！」

ヤクザ

「このガキヤ！！」

殴りかかってくるヤクザをカウンターで殴り返した。

ヤクザは大の字で延びている。

若頭

「兄ちゃん、えらい喧嘩なれしとるのう？」

でもな、こりゃあいかんやろ？

ヤクザ相手にこりゃあ。

兄貴分っぽい男の一言で他のヤクザ達が一斉に俺を取り囲んだ。



俺は覚悟を決める。

—

「事務所潰れたんだろ？  
で、体育館に避難かよ？」

ヤクザってのはダサイんだねえ？」

ヤクザ

「コラア！誰に物いいよんじゃい！おう？」

—

「お前だよ歯抜け！」

俺は前歯がないチンピラに言った。

ヤクザ

「こおんのボンクラがあ！殺してやるうあ！」

「バキッ！ドゴッ！」

向かってくるチンピラを殴りつけ、倒れた所に蹴りこんでやった！

—

「はい、これで2人。

ヤクザってのはこんなもんか？」

俺はあたかも余裕たっぷりで言った。

正直、朝の化け物鳥に比べたら怖くもなんともない。  
負ける気がしなかった。

ヤクザ達は一斉に襲いかかってくる！

「バキッ！3人、  
ベキッ！4人。」

まるでガンムのパイロットにでもなった気分だ。

俺の気分が段々とハイになってくる。

……学生の時もそうだった。  
喧嘩の途中でハイになる。

こうなったら自分でも抑えが効かなくなる。

「バキッ！ベキッ！ドゴッ！」

ヤクザ共がまるでクに見える。

若頭

「やめえー！！」

兄貴分みたいな奴の一言でヤクザ共の動きが止まった。

若頭

「なっさけないの！」

こんなガキ1人になにしとんや！」

—

「次はアンタが相手してくれんのかい？」

若頭

「はあ？」

アホか己は。

周り見てみい！」

・・・・・・・・いつの間にか周りには人だかりができていた。

若頭

「これ以上、恥の上塗りができるかい！  
いくぞ！おのれ等！」

ヤクザ達は体育館から出て行く。

千鶴

「あっ！」

何か言いたげな彼女の表情がそこにあった。

貴也

「千鶴なにしとんじゃ！はよーこい！」

彼女は少し淋しげな顔で体育館から出て行った。

【ワーーーーッ！！】

ヤクザ達が体育館からでると共に歓声上がる。

「あんた、たいしたもんや！」

「スカッとしたぞ若えの！」

「ようやってくれた。」

端々から声が飛ぶ。

・・・ウゼエ。

コイツラ糞だ！

自分では何もしないくせに、こいつの時ばかり言い寄ってくる。

虫々が走る。

まず、さっきのヤクザ共が、このままで終わる訳がない。

群馬

「一さん大丈夫ですか？」

—

「俺は此処を出る。」

群馬

「えっ？」

何処に行く宛あるんすか？」

—

「なくても此処よりかはましだよ。」

爺さん

「迷惑かけたの若いの。」

—  
「いや。・・・爺さん。・・・これが現実なんだな？」

爺さん

「・・・これからもつと酷くなるぞ。  
さっきのヤクザ達が仕切るような世の中になるかも知れん。  
ああいう奴らと向かい合える者が少ないからのう。」

群馬

「一さん。知り合いですか？」

—

「ああ。ちよつとな。  
じゃあ、俺行くわ！」

爺さん

「ちよつと待て。  
若いの、・・・さっきの彼女、救ってやれ。  
お前に助けて欲しそうな目をしておったぞ。」

—

「・・・俺の出る幕じゃねえよ！」

俺は体育館を後にした。

群馬

「まって！一さん。  
俺も連れてってくれよ！」

—  
「・・・行く宛なんかないぞ？」

群馬

「此処にいても飯も食べやしないし、何処に行っても同じでしょ？」

—  
「さっきのヤクザ達とまた揉めるかしんねえぞ？」

群馬

「・・・それはちょっと困るけど、それでも行く！」

—  
「解った。

行こう！

正直俺も1人よりか、誰か居てくれた方が助かるよ。」

俺達は避難所を後にした。

## 第10話 民家

避難所でヤクザ共と揉めてから、3日経っていた。

彼女と離れてからの3日間が物凄く長く感じていた。

千鶴は、今何しているのだろうか？  
そんな事ばかり考えていた。

避難所を出てから、俺と群馬は、寢床を探しているうちに山奥の民家にたどり着いた。

建物事態は半壊していたが、割としっかりとっていて、そこを寢床にしていた。

なにより助かったのが、その民家には非常食や米等が残っており、食べ物に関しては助かっていた。

とは言っても、やってる事は不法侵入や泥棒と何も変わらず、自分に嫌気がさしてくる。

・・・千鶴に会いたい・・・

これが俺の本音だった。

彼女の体育館を出て行く時の寂しげな顔が頭から離れなかった。

あの爺さんの言っていたように、千鶴は俺に助けを求めているのだろうか？

・・・千鶴に会いたい一心で頭の中では自分の都合の良いように考えている自分がいる。

千鶴は彼氏の所に戻っただけ。

それを俺が勝手に勘違いで助けに行つて・・・勘違いなら、恥を掻くだけではすまない。

葛藤を続ける自分がいた。

わずか数日で、こんなにも千鶴を愛している自分が居た。

これが一目惚れというものなのか？

胸が痛い。

会いたくて逢いたくて、どうしようもない自分がいた。

群馬の話では、あのヤクザ達は、地元のヤクザで組のトップである組長は刑務所に入っており、組長は近々引退すると噂であり組内では跡目争いともいうべき内部抗争が勃発しているということだった。

千鶴は大丈夫なんだろうか？

群馬

「あの若頭、女好きで有名ですよ！」

群馬の一言が俺を尚更苦しめる。

ラジオからは相変わらずの情報ばかりが流れ、世間の状態は苦しくなるばかりで何も変わらないでいた。



避難所においても食料は給付されず、このままでは食料をめくり暴動が起きて何ら不思議ではなかった。

ラジオから、「国民の皆様、今は我慢して下さい。

日本政府が必ず皆様を救います。」

といった何の根拠もない内容が繰り返し放送されていた。

俺は群馬を民家に残し山を下った。

どうしても千鶴の事が頭から離れず、様子だけでも見に行くことにした。

彼女が辛い思いをしないのであれば、それで良かった。

様子を伺いそれで帰るつもりだった。

だが、現実はそのほかない。

世の中というものは何故こんなにも理不尽で都合よくいかないものなのだろうか？

俺は群馬から聞いた情報を元に、ヤクザ達がいる場所を探した。

丸1日掛かり探し当てた奴らの居場所は港の倉庫だった。

ここで俺は現実を知ることになる。

## 第11話 強姦

### 港倉庫

貴也

「なあいいだろ？」

俺ずっとしてないんだぜ。いいだろ？」

千鶴

「やめてよ！」

貴也

「なんだよ！」

大丈夫だって、兄貴達みんな出掛けてるから、誰も来ねえよ！」

千鶴

「そう言っつんじゃないくて、今はそんな気分じゃないの。」

貴也

「・・・お前、避難所でてから変だぞ？」

「・・・まさか、あの男の事気になってんじゃないやねえだろうな？」

千鶴

「・・・変なこと言わないでよ。」

貴也

「いいから、やらせろ！あんま、怒らせんなよ？」

千鶴

「やめてったら!」

《ガチャ!》

熊谷

「貴也ちつとこい!」

貴也

「熊谷の兄貴。

・・・はい。」

熊谷

「若頭、連れてきました。」

若頭

「おう。

・・・貴也、お前に頼みあんだけどよ?」

貴也

「はい。何でしょうか?」

若頭

「ちつとよ、食料が足んねえんだわ。  
調達してきてくれや!」

貴也

「・・・解りました。」

熊谷

「おう！貴也！」

直ぐ行ってこい！

みんな腹空かしてんだよ！」

貴也

「はっはい。」

[illegible]

《ガチャ！》

千鶴

- 
- 
- 

- 
- 
- 
- 
- 
- 

・ ・ ・ ちよ ・ ・ ・ ちよつと何するんですか？

「いや……やめて……辞めて下さい！」

若頭

「退屈なんだよ。」

なーんにもすることなくてよ。

「やらせろや！」

千鶴

「いちや。」

おねが  
・  
・  
い

やめ・・・て。

千鶴の服を無理やり引き剥がす。

千鶴

「イヤーーーーッッッ！」

若頭

「かわいい下着着けやがつて！  
ええっ？

本当はこうして欲しかったんだろ？」

千鶴

「いやっ、お願い、やめて。」

《ズンッ！！！！》

・・・・・・・・・・・・・・・・・・いや・・・・・助けて・・・・・だ  
れか・・・・・・・・・・はじ・・・・・・・・め・・・・・さん・・・・・だ  
。

千鶴の目から涙がこぼれ落ちる。

熊谷

「おらっ！次は俺の番だ！  
へへっ、良い声だせよ！」

次から次に新たな男達が千鶴の体を弄ぶ。

熊谷

「若頭、こいつ最高ですね！  
締めまり具合も抜群でっせ！」

若頭

「おう！この女、食料と引き換えに体売らせろ！」

熊谷

「はい。」

貴也の奴はどうしますか？」

若頭

「ああ？・・・邪魔だ。帰ってきたら・・・殺せ！」

千鶴にとってこの場所は地獄だった。

誰も助けてはくれず、一晩中、代わる代わる違う男から・・・レイプされる。

逃げ出そうにも見張りがいるため逃げ出すことも出来なかった。

彼が来たときには、日が変わっていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・。。

一は倉庫の近くまで来た。

どうにかして中の状況が知りたかった。

2人のヤクザが倉庫から出て来て、その会話から・・・・・・・・現実を知る。

チンピラA

「それにしても、昨日の女、最高だったな？」

チンピラB

「ああ。千鶴とか言っただな。

ありや最高レベルの女だぞ！

あの声が溜まんねえー。思い出したらタツテきた。」

チンピラA

「あの、いやいやって声が溜まんねえよな？

兄貴に頼んで今日もやっちまおうぜ？」

—

「貴様ら！……誰を……どうしたって？」

よく、キレたと言う言葉を聞くが、本当にキレるというのは、こう  
いうことなのだろう。

俺は初めて……人を殺した。

まず1人を殴り倒し、直ぐにもう1人を捕まえる。

捕まえたまま、動けなくなるくらいに殴りつけ、残ったもう1人を  
蹴り続ける。

捕まえられてた奴が、隙をみてナイフを取り出す。

すぐさまソイツに肘を入れた。

ナイフは地面に落ち、直ぐに拾い、そのまま……刺し殺した。

残った1人は殺さずに生かしておく。

内部の情報を知るために。

そこからは記憶が飛ぶ・・・・・・・・。。。

気が付けば、倉庫内にヤクザ達の死体が無数に転がっていた。

俺が殺したのだろう。

目の前には瀕死の若頭がいた。

ソイツは拳銃を取り出し俺に向け発砲した。

弾は顔先をかすめ、次の瞬間には若頭の顔に蹴りを入れ込む。

拳銃を奪い取った俺は・・・・迷わず・・・・撃つ。

倉庫内に銃声が響き渡る。

俺は千鶴を探した。

扉という扉を開け・・・・千鶴を見つけた。



## 第12話 犯罪

目の前にいるのは、ボロボロになった千鶴だった。

服はボロボロに破け、殆ど裸と言っても良いほどに引きちぎられていた。

何て言つて声を掛けていいのか解らない。

俺が後1日早く行動に移す事が出来ていたならば……………。

俺は着ていたパーカーを彼女に被せ言った。

—

「……………ごめん。」

「……………来るの……………遅くなった。」

別に迎えに来る約束なんてしていないのだが、こういう言葉しか見あたらなかった。

千鶴

「……………一さん……………わたし……………汚れちゃった。」

千鶴は泣き崩れ、俺は彼女を抱きしめた。

—

「大丈夫。」

全部……………夢だったんだ。

悪い夢からは……………もう覚めたから。」

俺には彼女を抱きしめることしか出来なかった。

千鶴は只泣き続けた。

泣きつかれるまですっと。

彼女のこんな姿は見たくなかった。

何故、彼女がこんなめに。

俺が彼女をデパートから救ったのは間違いだったのだろうか？

俺が助け出さなければ、こんなに辛い目に遭うことはなかっただろう。

—

「・・・これからは・・・俺が・君を守る！  
君を・・・辛い目には遭わせないから。」

俺達は倉庫を出た。

このまま群馬がいる民家に連れて帰る訳にもいかず、彼女が落ち着くまで誰もいない民家で休む事にした。

## 港倉庫

貴也

「何だ？何が起きたんだ？  
どっかの組が襲撃してきたのか？」

貴也が食料を調達し、倉庫に戻った時、倉庫内は死体の山と化していた。

熊谷

「たつ貴也か？」

貴也

「熊谷の兄貴？」

「・・・一体何があつたんですか？」

熊谷

「・・・避難所で揉めた、あの男だ。

いきなり攻めてきて、お前の女を人質に取り・・・俺達は手出しできなかつた。」

貴也

「千鶴は？千鶴はどうなつたんですか？」

熊谷

「奴が嫌がるお前の女を無理やり連れて行きやがつた。

若頭は、お前の女、守ろうとして・・・死んだ。」

貴也

「そつそんな。」

熊谷

「貴也。この責任どうとるつもりじゃ？おつ？」

熊谷は不適に笑った。

・・・・・・。丁度そのころ、日本全国でも同じ様な事件や殺人、強姦等が多発していた。

隕石による災害から数日が経ち、国民は国が助けられないことを理解し始めていた。

殺人を犯そうとも、強姦しようとも、それを裁く者達がない事に気付いたのだ。

国はマトモに起動できなくなっていた。

政府は必死になり国民を抑えようとしていたが、政府の各機関自体が大打撃を受けており、とても国民の犯罪を抑えることは出来なかった。

・・・国は・・・崩壊したのだ。

世界中を巻き込んだ、この災害は、僅か数日で国の機関を停止させた。

もはや政府には何の力もない。

警察、自衛隊、そして各政府の機関は国民に徹底的に攻撃されることになる。

そして、同じ国の国民同士が食料を奪い合争いだした。

もっとも力を持っていたのは、上下関係がハッキリしている暴力団。

洗脳と言っても過言ではない宗教団体。

他にも、暴走族やチーマー、海外マフィア等が力を示し、国を脅かしていく。

そしてまた、一達も、この戦いに巻き込まれていくことになる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4590d/>

---

天駆龍閃

2010年10月9日02時09分発行